

# 琉球大学学術リポジトリ

## 進路CAMIの因子分析的研究： 高校生を対象とした性差・学年差の検討

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 等, 島袋, 恒男, 仲村, 美恵子, 大城, 琴恵, Hirose, Hitoshi, Shimabukuro, Tsuneo, Nakamura, Mieko, Oshiro, Kotoe メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/2138">http://hdl.handle.net/20.500.12000/2138</a>

# 進路CAMIの因子分析的研究

— 高校生を対象とした性差・学年差の検討 —

廣瀬 等・島袋 恒男・仲村 美恵子・大城 琴恵  
(琉球大学 教育学部) (沖縄県立教育センター) (名桜大学)

## A FACTOR ANALYTIC STUDY ON THE CAREER CAMI

— AN ANALYSIS OF SEX AND GRADE DIFFERENCES IN HIGH SCHOOL STUDENTS —

Hitoshi HIROSE, Tsuneo SHIMABUKURO,  
(College of Education, University of the Ryukyus)

Mieko NAKAMURA, Kotoe OSHIRO,  
(Okinawa Prefectural Education Center) (Meio University)

高校生の進路発達に関して、島袋・廣瀬・井上・大嶺・高嶺(1996)は、進路CAMI尺度を作成して高校1年生と3年生に実施し、その発達について検討した。CAMIとは、目的達成への統制感(Control Beliefs)、目的達成のための手段保有感(Agency Beliefs)、そして手段-目的関係の認知(Means-Ends Beliefs)の頭文字にInterviewのIを加えたものである。Skinner, Chapman & Baltes(1988)は、従来のLocus of Controlや原因帰属に関する研究の成果に行動の予測的妥当性に一貫性がないことから、達成への統制感と手段保有感、手段-目的関係の三者の関係のあり方を理解することが重要であると考えた。それを一般にCAMI理論と呼んでいる(島袋・嘉数・廣瀬・前原,1995)。島袋他(1996)では、CAMI理論に基づき、高校生の一般的な進路意識の特徴と問題点を探り、効果的な進路指導や学習指導のあり方を考察することを目的として、進路CAMI尺度を作成した。

島袋他(1996)の結果では、まず、進路CAMI尺度の各尺度は内的整合性が高く、信頼性の高い尺度であることが確認された。その上で、1年生よりも3年生の方が、希望する大学への進学、将来の希望する職業、将来の希望する社会生活、今後の学習達成の4つの進路目標達成への自信の

程度を示す「進路達成への統制感」が高まることが示された。また、上記の4つの進路目的を達成する手段として、人は一般にどの手段をどの程度用いるかを示す「手段-目的関係の認知」と、進路目的を達成するための手段を自分がどの程度保有しているかを示す「手段の保有感」も高まることが示された。さらに、「努力」と「能力」という観点から結果をまとめてみると、「努力」と「能力」の手段の保有感が進路達成への統制感を規定しており、その傾向が大学受験を間近にした高校3年生において一層顕著になることが認められた。しかし、「努力」に比較して「能力」の手段の保有感は学習行動等との相関が弱く、一部の高校生では主観的な自己理解になり、進路・学習不適応につながる可能性のあることが示唆された。

ところで、高校生の進路発達に関する研究は、他にもいろいろな視点から行われており、例えば、坂柳(1992,1993)は、中学生・高校生の進路発達ないし進路成熟の促進を目指す進路指導においては、主要な進路内容として、①人生進路、②進路指導、③教育進路、の3つの進路系列を視野に入れ、明確化することが必要であるとし、①教育進路成熟(主に、進学先の選択・決定への取り組み姿勢)、②職業的進路成熟(主に、職業選択への取り組み姿勢)、③人生進路成熟(主に、人生

や生き方への取り組み姿勢)の3系列の進路成熟度が測定できる「進路成熟態度尺度」を使用して検討を行っている。研究の結果、一般的特徴として、教育・人生・職業の各進路成熟は、学年が進むにつれて、上昇的に変化しており、進路成熟の高まりがみられることが示された。

進路成熟態度尺度を使用して沖縄県の児童・生徒の進路成熟態度の検討を行った研究としては、まず、廣瀬・井上・島袋(1996)が挙げられ、その中では、小学生、中学生、高校生を調査対象として、坂柳・竹内(1986)の進路成熟態度尺度を用いて、発達的な変化について検討を行っている。廣瀬・井上他(1996)の結果では、全体的な傾向として、進路成熟態度は職業・進学面共に、小・中学生の間にはあまり変化がなく、高校生になると高まることが示唆された。さらに、廣瀬・島袋・井上(1996)では、将来の職業選択と進路成熟態度との関連について検討した。その結果、例えば職業に関する進路のこれからの計画(職業的進路計画度)については、小学生においては、男子の願望色の強い職業選択者が多く、高校生になるにつれて、願望色の強い職業選択者は減り、女子については現実的な職業選択者が少しずつ増えていくことが示唆された。

以上のように、進路発達に関して、これまでも多くの検討がなされてきた。本研究は、これまでになされてきた研究のいくつかを基礎として、より詳細に検討しようとするものである。具体的には、まず、高校生を被調査者とするが、本研究では沖縄県の高校1年生、2年生、3年生の全ての学年を対象とすることにする。これまでの研究では、全ての学年を対象とした研究は少なく、きめの細かい考察が可能となるであろう。また、尺度としては、進路CAMI尺度(島袋他,1996)と進路成熟態度尺度(坂柳,1992;1993)を用いる。進路成熟態度尺度は、3系列の進路成熟度が測定できるものを用いるため、廣瀬・井上他(1996)や廣瀬・島袋他(1996)に比べ、総合的な考察が期待できると考えられる。

本研究では、高校生の全ての学年に進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度を実施する。そして分析では、まず、①進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の各項目についての因子分析を行い、進路

CAMI尺度と進路成熟態度尺度の特徴について検討する。さらに、②進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の各因子間の相関関係を求め、進路CAMI尺度が進路成熟態度尺度といかに関連しているかについて検討を行うことにする。そして最後に、③進路CAMI尺度に関して、性別(男子/女子)、学年別(1年生/2年生/3年生)を要因とした分散分析を行い、性別、学年別の違いにより進路CAMI尺度の各因子得点がいかに異なるかをみることにより、高校生の進路発達について詳細に検討することを目的とする。

## 方 法

**被調査者** 沖縄県の県立高等学校の1年生187名(男子71名,女子116名),2年生187名(男子78名,女子109名),3年生170名(男子72名,女子98名)が被調査者であった。

**調査期日** 1996年6月に実施された。

**調査尺度と手続き** 調査にあたり、進路成熟態度尺度(坂柳,1992;1993)の45項目と進路CAMI尺度(島袋他,1996)の40項目が含まれる調査用紙に、学年、性別等のデモグラフィック要因を加えて調査票を作成した。それぞれの尺度の項目には、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。調査票は、各クラス担任を介して生徒に配布され、担任教師の説明・指導のもとで記入回答させた。

## 結果と考察

結果の分析にあたり、まず、それぞれの項目の「あてはまらない」から「あてはまる」の4段階に、1点から4点を与えた。さらに、進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の因子分析を行い、続いて両尺度間の相関関係を求めた。さらに、進路CAMI尺度に関して、性別と学年別を要因とした分散分析を行い高校生の進路発達について検討した。

1)進路CAMI尺度の因子分析 進路CAMI尺度の40項目について主因子法による因子分析を行い、固有値1以上の9因子をバリマックス回転し、単純構造を求めた。その結果を示したのが、表1である。まず、第1因子は以下の項目に関連

表1 進路CAMI尺度に関する因子分析表

項目	因子負荷量									h <sup>2</sup>
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子	第8因子	第9因子	
項目6	.457								-.561	.645
項目14	.732									.706
項目15	.707									.667
項目18	.745									.738
項目19	.760									.650
項目2	.665	.453								.677
項目4	.598	.489								.620
項目1		.698								.644
項目3		.755								.650
項目5		.721								.602
項目9		.788								.720
項目10		.401							-.518	.625
項目13		.444	.452							.471
項目8			.699							.603
項目12			.752							.625
項目16			.749							.663
項目17			.550							.465
項目20			.612							.568
項目37				.810						.705
項目38				.894						.826
項目39				.832						.753
項目40				.863						.776
項目23					.651					.580
項目27					.731					.592
項目31					.721					.612
項目35					.765					.652
項目21						.806				.681
項目25						.791				.684
項目29						.631				.514
項目33						.762				.654
項目24							.465			.363
項目28							.727			.629
項目32							.773			.658
項目36							.744			.677
項目26							.419	.422		.437
項目22								.778		.670
項目30								.786		.717
項目34								.779		.665
項目7									.692	.628
項目11									.645	.615
固有値	3.851	3.328	3.149	3.127	2.777	2.498	2.475	2.231	1.992	25.428
寄与率(%)	9.628	8.320	7.872	7.818	6.943	6.245	6.188	5.578	4.980	63.570

しており、項目6「私には、よい成績をとれる能力があると思います」、項目14「将来希望する職業につくための、能力や才能が私にはあると思います」、項目15「私は将来運良く、希望通りの職業につけると思います」、項目18「将来、希望通りの社会生活（人生）を送っている能力や資質が、私にはあると思います」、項目19「将来、私は運が開けて希望通りの社会生活（人生）を送れるようになると思います」、項目2「私は将来、おそらく希望する職業に就けると思います」、そして、項目4「私は、将来自分の予想通りの社会生活を送ることができると思います」に正の負荷が見られた。これらの結果から、この因子は能力と運の両方の保有感と統制感に関連しており、「能力・運の保有感と統制感」の因子と命名した。

次に、第2因子は、第1因子にも含まれた項目2と項目4とともに、項目1「私は自分のだいたい希望する大学に進学することができると思います」、項目3「私は、自分の進学に必要なレベルまで成績を良くしていると思います」、項目5「私は成績を良くするために、計画をたてて勉強しています」、項目9「私は希望する大学へ進学するために、一生懸命努力して勉強しています」、項目10「私には、希望の大学へ進学できる能力がとてもあると思います」、そして、項目13「私は将来希望する職業のことを、いろいろ自分で調べたり、人に聞いたりしています」に正の負荷が見られた。このため、この因子は努力の保有感と統制感に関連していると考えられ、「努力の保有感と統制感」の因子と命名した。第3因子は、第2因子にも含まれた項目13とともに、項目8「勉強ができるように、私にはいろいろと助言してくれたり、励ましてくれる人がいます」、項目12「私が希望の大学へ進学できたとしたら、それは周りの人々のよきアドバイスがあるからだと思います」、項目16「私が将来希望通り就職できたとしたら、それはいろいろ良きアドバイスをしてくれる人がいるからです」、項目17「将来、希望通りの社会生活（人生）を送るためには、何が大事なことかいろいろ考えています」、そして、項目20「将来、私が希望通りの社会生活ができるように、周りの人々がいろいろ協力し、支えてくれると思います」に正の負荷が見られた。これらの結果、この因子

は他者の援助の保有感に関連しているといえ、「他者の援助の保有感」の因子と命名した。

続いて、第4因子は、項目37「なぜある生徒が希望通りの大学へ合格できるのか、私にはその訳は分かりません」、項目38「私には、なぜ希望通りの職業につける人がいるのか分かりません」、項目39「なぜ、ある生徒がよい成績がとれるのか、私はよく分かりません」、そして、項目40「ある人がなぜ、希望通りの社会生活や人生を送ることができるのかその訳は私にはわかりません」に正の負荷が見られた。これらの結果から、この因子は未知の原因に関連している因子と考えられ、「未知の原因」の因子と命名した。第5因子は、項目23「ある生徒が勉強がよくできるのは、もともと運が良くツイているからだと思います」、項目27「ある生徒が将来、希望通りの社会生活（人生）を送れるとしたら、それは運が良いからだと思います」、項目31「もともと運がよくツイている生徒は、希望通りの大学へ進学できると思います」、そして、項目35「いろいろと運が良く、ツキのある生徒は、将来希望通りの職業に就けると思います」に正の負荷が見られた。これらの結果、この因子は運の認識に関連している因子と考えられ、「運の認識」の因子と命名した。

さらに、第6因子は、項目21「ある生徒の成績が良いのは、一生懸命努力して勉強しているからだと思います」、項目25「ある人が将来、希望通りの社会生活（人生）を送れるとしたら、それはその人がそのための努力をいろいろ積み重ねてきたからです」、項目29「希望通りの大学へ進学できる生徒は、決まって一生懸命勉強しているものです」、そして、項目33「ある生徒が将来、希望通りの職業に就けたとしたら、それはその人が計画をたてて勉強を続けてきたからです」に正の負荷が見られた。これらの結果より、この因子は努力の認識に関連している因子といえ、「努力の認識」の因子と命名した。第7因子は、項目24「ある生徒の成績が高いのは、まわりにいろいろと教えてくれる人がいるからです」、項目28「人は、いろいろとアドバイスをしてくれたり、助けてくれるひとがいると思ひ通りの人生を歩んでいけると思ひます」、項目32「いろいろと指導してくれる人が周りにいると、たいていの生徒は希望通り

の大学へ合格できます」, 項目36「いろいろと周りのひとからアドバイスしてもらえ生徒は、将来希望通りの就職ができると思います」, そして、項目26「能力や才能が豊かならば、その人は希望通りの社会生活(人生)を送れると思います」に正の負荷が見られた。これらの結果、この因子は他者の援助についての認識に関連している因子と考えられ、「他者の援助の認識」の因子と命名した。

また、第8因子は、第7因子にも含まれた項目26とともに、項目22「ある生徒が勉強がよくできるのは、その人がもともと頭が良いからです」、項目30「ある生徒が希望通りの大学へ進学できたとしたら、それはその人がもともと頭が良かったからです」、そして、項目34「ある生徒が将来、希望通りの就職ができたとしたら、それはもともとその人に能力があったからだと思います」に正の負荷が見られた。これらの結果から、この因子は能力の認識に関連している因子といえ、「能力の認識」の因子と命名した。最後の第9因子は、第1因子にも含まれた項目6と、第2・第3因子にも含まれた項目10に負の負荷が見られ、項目7「もし私がいつもより良い成績がとれたなら(取れたのは)、それは運が良かったからです」と項目11「もし私が希望の大学へ進学できたとしたら、それは運がいいからだだと思います」に正の負荷が見られた。これらの結果、この因子は能力の非保有感と運の保有感に関連している因子と考えられ、「能力の非保有感と運の保有感」の因子と命名した。

なお、以上の9因子で全分散の63.570%が説明されている。全体的な特徴としては、まず、①統制感については、「能力と運」、および「努力」に関連が深いことが示され、②手段の保有感には、「能力と運」、「努力」、「他者の援助」、および「能力の非保有感と運の保有感」の4つの因子に分かれることが示され、③手段の認識については、「未知の原因」、「運」、「努力」、「他者の援助」、および「能力」の5つの因子に分かれることが示されたことが挙げられる。統制感が「能力と運」、および「努力」に関連が深いことが示された結果をより詳細に検討すると、進学に関する項目(項目1・3)は努力の保有感と関連があり、就職に関する項目(項目2・4)は能力・運、および努力の両保有感と関連していることが示されてい

る。これらの結果は、努力をしていると考えているものほど、進学ができるという統制感をもっていることを示し、また、就職に関しては、努力のみではなく、能力・運があるという保有感も関連していることを示した結果である。ここで、努力の保有感という視点から見ると、努力の保有感は統制感の項目の全てと関連しており、進路に関する統制感にとって、努力の保有感が最も深く関わっていると考えられる。

次に、手段の保有感が、「能力と運」、「努力」、「他者の援助」、および「能力の非保有感と運の保有感」の4つの因子に分かれることが示された結果について考えてみると、まず、能力の保有感が運の保有感とともに1つの因子を形成したことから、進路に関して能力をもっていると考えている者ほど、運もいいと考えていることが分かる。つまり、ここでの「能力」は、一般に考えられているような安定的要因としての能力ではなく、自己高揚的帰属としての不安定で一時的なものであると考えることもできる。また、「能力の非保有感と運の保有感」の因子についても見てみると、ここでは能力の非保有感と運の保有感に関連しており、「能力はないが、運がよければ進学できる」と考えている者も一方で存在することが分かる。これらの結果を先の統制感との関わりで考えてみると、「私は将来、おそらく希望の職業につけると思います」と考えている者の中には、常に努力を行い、現実を踏まえた上でそう判断している者と、能力も運もあるから大丈夫だろうと安易に結論づけている者が存在しているとも考えられる。他者の援助の保有感については、唯一、統制感との関わりがなく、直接的には統制感に関わっていないことが示された。他者の援助の保有感と他の手段保有感との関わりについては、他の分析の結果も踏まえた上で、後に再び考察を行うことにする。

続いて、手段の認識について考えてみる。手段の認識は、「未知の原因」、「運」、「努力」、「他者の援助」、および「能力」の5つの因子に分かれることが示された。これは、島袋他(1996)で示された因子と同じであり、また、それぞれの因子を構成する項目も同一なものとなっている。これは、手段の認識に関しては理論的構成を確認する

結果となったと考えることができる。つまり、進学にともなう手段の認識については、「未知の原因」、「運」、「努力」、「他者の援助」、および「能力」の5つの因子が独立に影響していると考えられることができる。

2) 進路成熟態度尺度の因子分析 進路成熟態度尺度の45項目について、主因子法による因子分析を行い、固有値1以上の6因子をバリマックス回転し、単純構造を求めた。その結果を示したのが、表2である。まず、第1因子は以下の項目に関連しており、項目1「進学のための勉強は、自分から進んでしている」、項目3「将来どんな学校に進学するのか、見通しを立てている」、項目4「志望校に進学するための計画をたてて、準備をしている」、項目5「志望校の校風や特徴などは、自分で調べている」、項目6「どんな上級学校を選ぶかを、自分で考えている」、項目7「進学や進学先のことについて考えている」、項目8「進学の目標をたてて、それに向かって努力している」、項目9「進学のことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている」、項目12「志望校に進学するための道筋が、わかっている」、項目13「進学先についていろいろと比較し検討している」、項目14「進学先は、自分で責任をもってきめている」、そして、項目15「自分を生かせる上級学校について、調べている」に正の負荷が見られた。これらの結果から、この因子は教育的な進路の成熟に関連しており、「教育進路成熟」の因子と命名した。

次に、第2因子は、項目31「これからの人生を豊かにするために努力している」、項目32「これからの人生のことを考えて、自分なりの人生設計を立てている」、項目33「これからの人生のことについて考えている」、項目35「いろいろな生き方を比べたりして、自分の生き方を探している」、項目36「どんな人生や生き方があるのか、関心がある」、項目38「これからの人生について自分なりの目標をもっている」、項目39「人生の意味について考えている」、項目41「これからの人生について、見通しを立てている」、項目42「どんな生き方をしたらよいのか、自分で考えている」、項目43「人生のことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている」、項目44「これからの人

生での出来事を自分なりに予想できる」、そして、項目45「自分にふさわしい生き方を、いろいろと考えている」に正の負荷が見られた。これらの結果、この因子は人生全般の進路の成熟に関連しており、「人生進路成熟」の因子と命名した。

続いて、第3因子は、項目16「将来の職業の準備は、自分から進んでしている」、項目19「将来、職業につくための計画を立て、準備している」、項目20「職業の内容や就職方法などは、自分で調べている」、項目23「職業につくための目標を立て、それに向かって努力している」、項目24「職業を選ぶことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている」、項目27「希望する職業につくための道筋が、わかっている」、項目28「将来の職業や就職先について、いろいろと比較し検討している」、そして、項目30「自分を生かせる職業について、調べている」に正の負荷が見られた。これらの結果、この因子は職業的な進路の成熟に関連しており、「職業進路成熟」の因子と命名した。なお、第1因子から第3因子までの因子の命名は、坂柳(1992,1993)の命名に基づいている。

さらに、第4因子は、項目10「進学先は、自分の意志できめている」、項目11「何のために進学するのかを考えている」、項目18「将来どんな職業につくのか、見通しを立てている」、項目21「どんな職業を選ぶかを、自分で考えている」、項目22「将来の職業や就職先のことについて考えている」、項目25「将来の職業については、自分の意志できめている」、項目26「何のために就職するのかを考えている」、そして、項目29「将来の職業や就職先は、自分で責任をもって決めている」に正の負荷が見られた。これらの結果から、この因子は将来の展望や決定感に関連しており、「将来展望と決定感」の因子と命名した。また、第5因子は、項目34「これからの人生では、自分の意思と責任で生き方を決めていきたい」、項目37「これからの自分の人生は、自分の力で切り開いていく」、そして、項目40「自分で責任をもってこれからの人生を送っていく」に正の負荷が見られた。これらの結果、この因子は人生決定の要求に関連しており、「人生決定の要求」の因子と命名した。第6因子は、項目2「どんな種類の学校や学科があるのか、気にしている」と項目17「どんな種類

表2 進路成熟態度尺度に関する因子分析表

項目	因子負荷量						h <sup>2</sup>
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	
項目1	.626						.500
項目3	.727						.721
項目4	.776						.706
項目5	.643						.605
項目6	.607						.477
項目7	.582						.634
項目8	.721						.665
項目9	.522						.638
項目12	.610						.557
項目13	.551						.610
項目14	.503						.658
項目15	.529						.581
項目31		.404					.435
項目32		.560					.555
項目33		.655					.520
項目35		.637					.563
項目36		.555					.554
項目38		.507					.545
項目39		.660					.506
項目41		.637					.664
項目42		.674					.622
項目43		.566					.506
項目44		.599					.478
項目45		.622					.510
項目16			.491				.587
項目19			.559				.692
項目20			.678				.647
項目23			.614				.667
項目24			.733				.743
項目27			.473				.636
項目28			.683				.648
項目30			.470				.566
項目10				.513			.610
項目11				.500			.503
項目18				.674			.713
項目21				.758			.690
項目22				.619			.651
項目25				.721			.689
項目26				.410			.448
項目29				.583			.687
項目34					.644		.545
項目37					.712		.615
項目40					.740		.682
項目2						.566	.577
項目17						.624	.524
固有値	6.532	5.399	5.049	4.952	2.906	2.092	26.930
寄与率(%)	14.516	11.998	11.220	11.004	6.458	4.649	59.844

の職業や産業があるのか、気にしている」に正の負荷が見られた。これらの結果から、この因子は学校・職業への関心に関連しており、「学校・職業への関心」の因子と命名した。

なお、以上の6因子で全分散の59.844%が説明されている。全体的な特徴としては、まず、①坂柳(1992, 1993)で示された、教育進路成熟、人生進路成熟、職業進路成熟の各因子が本研究でも見出され、②その他の因子として、「将来展望と決定感」、「人生決定の要求」、そして「学校・職業への関心」の各因子が独自に因子として見いだされたことが挙げられる。最初に、教育進路成熟、人生進路成熟、および職業進路成熟の各因子については、坂柳(1992, 1993)で示された要因と同じであり、それぞれ、教育、人生、職業についての進路成熟に関わる因子であると言える。次に、「将来展望と決定感」、「人生決定の要求」、そして「学校・職業への関心」の独自の因子について考えていく。最初に、「将来展望と決定感」は、8つの項目が含まれており、進路成熟態度尺度の中でも重要な因子であると考えられる。この因子には、「進学先は、自分の意志できめている」や「将来の職業や就職先のことについて考えている」など、自分で将来のことを考えて進路を決定していくという項目が含まれているのが特徴である。この結果から、進学、就職の進路成熟において、「進路を自ら決定する」ということが重要な事柄になっていることが示されたと言える。なお、人生全般についての進路の決定は、別の因子「人生決定の要求」としてまとまったことから、「進学、就職に関する決定」と「人生についての決定」は、別のものとして捉えられるといえよう。さらに、「学校・職業への関心」が教育進路成熟や職業進路成熟の因子と別になったことから、単に進学や就職に対して関心をもつこと自体は、進路成熟とあまり関わりがないとも考えられる。

3) 進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の相関関係 表3に進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の相関係数を示す。なお、表には相関係数が5%水準で有意なもののみを示している。また、本研究では、相関係数が.300以上の項目に特に着目して考察を行うことにする。相関表の結果から、まず、進路CAMIの第1、第2、第3因子が進路

成熟態度と関わりがあることが分かる。その中でも特に、相関係数の値から、進路CAMI尺度の第2因子が進路成熟態度と深く関わっていると言えるだろう。進路CAMI尺度の第2因子は、「努力の保有感と統制感」の因子であり、進路の成熟において努力の保有感が重要な役割を果たしていることが分かる。さらに、進路CAMI尺度の第1因子「能力・運の保有感と統制感」と第3因子「他者の援助の保有感」も相関が認められることから、能力・運の保有感や、他者の援助の保有感も、進路の成熟において一定の役割を果たしているものと考えられる。

なお、進路CAMI尺度の第4因子から第8因子までは、手段の認識に関する要因であり、表3の結果から、「どのようにしたら進学や就職できるか」という手段の認識の高低は、直接には進路成熟態度に結びついていないことが分かる。つまり、進学や就職に対してどのようにしたら良いかを知っていても、それだけでは進路意識の成熟には結びつかず、努力や能力・運、他者の保有感をもつことにより、始めて進路意識の成熟に結びつくと言える。

4) 進路CAMI尺度の性別×学年別の分散分析 まず、被験者それぞれについて、各進路CAMI尺度の因子ごとの「因子の合成得点」の平均を算出した。そして、各進路CAMI尺度の因子ごとに、2(性別)×3(学年別)の2要因分散分析を行った。各進路CAMI尺度の因子ごとの、性別、学年別の合成得点、および分散分析と多重比較(Duncan法)の結果を表4に示す。表中の英文字の違いは、平均値の有意差(5%水準)を示している。

分析の結果、まず「能力・運の保有感と統制感」については、性別、学年別の各主効果も交互作用も認められなかった。これは、性別、学年別により能力や運の保有感に違いがないことを示している。進路成熟態度尺度との相関が認められたことも含めて考えると、1年生から3年生まで、進路成熟が比較的高く能力や運の保有感をもつ生徒が一定数認められ、学年が上がるにつれても人数が変化しないと考えられる。これは、性別の場合についても同様に説明できると言える。他の視点から考えれば、能力や運の保有感の違いは、発達に

表3 進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の相関表

		進路成熟態度尺度					
		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
進 路 C A M I 尺 度	第1因子	.461***	.498***	.530***	.471***	.318***	.217***
	第2因子	.704***	.574***	.694***	.547***	.314***	.374***
	第3因子	.474***	.570***	.524***	.498***	.361***	.349***
	第4因子		-.089*		-.171***	-.222***	
	第5因子					-.092*	
	第6因子		.142**		.176***	.264***	.110*
	第7因子	.102*	.206***	.152***	.162***		.169***
	第8因子						
	第9因子	-.340***	-.267***	-.213***	-.220***	-.200***	-.183***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

表4 進路CAMI尺度における学年別×性別の分析結果

進路CAMI尺度	(F値)		(因子の合成得点)				
	性別	学年別	性別多重比較		学年別多重比較		
			男子	女子	1	2	3
能力・運の保有感と統制感	0.01	2.16	16.60	16.60	16.69	16.05	17.13
努力の保有感と統制感	9.46**	8.31***	17.67 B	18.99 A	18.40 B	17.45 B	19.65 A
他者の援助の保有感	32.84***	4.88**	15.36 B	17.38 A	17.16 A	15.81 B	16.72 A
未知の原因	4.61*	1.59	7.19 A	6.64 B	6.62	6.84	7.14
運の認識	0.01	4.75**	8.05	8.05	7.06 B	8.08 A B	8.51 A
努力の認識	27.01***	7.62***	13.90 B	14.84 A	14.94 A	14.28 B	14.13 B
他者の援助の認識	4.71*	5.74**	12.92 B	13.51 A	13.82 A	13.21 A B	12.71 B
能力の認識	1.68	0.61	10.53	10.81	10.56	10.80	10.73
能力の非保有感と運の保有感	5.41*	2.29	-0.06 B	0.48 A	0.10	0.52	0.14

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$  ※多重比較の欄の異なる英文字間は、5%水準で有意な差があることを示す

よる差というよりも、個人差にその原因を求めることができるとも言える。なお、この因子と関連するものとして「能力の非保有感と運の保有感」がある。この因子では、性別のみに主効果が認められ、男子よりも女子の方が高い結果となった。このため、「能力はないが運はある」と考える者がおり、それは女子の方が多いという結果であったと言える。ただし、この要因は進路成熟態度尺度との相関がほとんど認められなかったことから、進路の成熟とは関わりがないと言える。続いて、「努力の保有感と統制感」については、性別、学年別の各主効果が認められ、交互作用は認められなかった。この結果は、男子よりも女子の方が、また1・2年生よりも3年生の方が、努力の保有感と統制感が高いことを示している。つまり、努力の保有感と統制感については、学年が高くなるに従って高まるものであり、また、男子よりも女子の方が高いと言える。同様な結果が、次の「他者の援助の保有感」でも認められ、他者の援助の保有感は、3年生になると高まり、また、男子よりも女子の方が高い結果となった。このような、「努力の保有感と統制感」と「他者の援助の保有感」の同様な結果は、両因子の密接な関係から説明できると思われる。すなわち、鳥袋他(1996)でも考察されているように、「他者の援助」が「努力の保有感」を支えるものとして機能している可能性が考えられる。具体的に述べるならば、進路や就職のことについて努力ができるためには他者の援助が必要であり、また逆に、他者の援助があって進路や就職のことについて努力ができると考えられるのである。

次に、「未知の原因」について見てみると、性別の主効果のみが認められた。つまり、女子よりも男子の方が高いという結果であり、男子の方が、例えば「なぜある生徒が希望通りの大学へ合格できるか、わたしにはその訳はわかりません」といった「未知の原因」を多く挙げていることが分かる。これは、性別の要因に主効果が認められる他の因子が全て女子の方が高いことと合わせて考えると、男子の進路に対する相対的な未熟さを示すものとも考えられる。続いて、「運の認識」については、学年が上がるに従い上昇していることが示された。これは、「努力の保有感と統制感」や「他

者の援助の保有感」が学年を追って上昇することと裏表の関係にあるとも考えられる。すなわち、進路に対して努力もして、援助もあると考え始めると、同時に自分の限界や現実の厳しさも知ることになり、これだけはうまくいかないのではないかという不安を抱え、それを反映した形で「運の認識」の上昇があらわれたとも考えられる。これとちょうど逆の関係にあるのが、次の「努力の認識」と「他者の援助の認識」であると思われる。両因子とも、学年が上がるに従って下降することが示されたと言える。これは、先に述べたように、進路に対して努力もして、援助もあることが、同時に現実を知ることとなり、これまでの努力や援助だけではうまくいかないのではないかという、不安が広がるためだとも考えられる。なお、性差に関しては、両因子とも男子より女子の方が高いという結果となった。これは、基準となる水準が、それぞれ男子より女子の方が高いことを示すものであり、女子の方が3年間を通じて「努力の認識」や「他者の援助の認識」をより多くもっていると言える。

さらに、「能力の認識」については、性別や学年別の主効果も交互作用も認められず、また進路成熟態度との相関も全く見られなかった。これは、「能力の認識」が進路の成熟において、特に重要な影響は及ぼしていないことを示すものであると思われる。

## ま と め

本研究では、まず、進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の各項目についての因子分析を行い、進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の特徴について検討した。進路CAMI尺度については、①統制感と手段の保有感とのつながりが認められ、特に努力の保有感は統制感の項目の全てと関連しており、進路に関する統制感にとって、努力の保有感が最も重要であると考えられた。また、他の結果も合わせて考えると、②他者の援助の保有感は、直接的には統制感と関わってはいないが、努力の保有感を支えるものとなっていることが考えられた。さらに、③手段の認識については、鳥袋他(1996)の理論的構成を確認する結果であった。続いて、進路成熟態度尺度については、①坂柳

(1992, 1993)で示された, 教育進路成熟, 人生進路成熟, 職業進路成熟の各因子が本研究でも見出され, 加えて, ②進路の決定に関する因子が見いだされた。そして, この因子は, 進学・就職に関するものと人生に関するものの2因子に分かれることが示された。

次に, 進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の各因子間の相関係数を求め, 進路CAMI尺度と進路成熟態度尺度の関連について検討した。その結果, ①進路CAMI尺度の手段の保有感に関する3因子と進路成熟態度尺度との相関が認められ, 特に「努力の保有感と統制感」とのつながりが深いことが示された。また, ②進路CAMI尺度の手段の認識と進路成熟態度尺度との相関は認められず, 手段の認識が進路意識の成熟と直接的には関連がないことが示された。

最後に, 性別と学年別の違いによる, 高校生の進路発達の違いを検討するため, 進路CAMI尺度の各因子得点が性別と学年別の違いによりかか異なるかを検討した。分析の結果, まず, ①全体的に女子の得点が高く, 女子に比べて男子の進路に対する相対的な未熟さが示された。また, ②「努力の保有感と統制感」と「他者の援助の保有感」は, 共に3年生において高まることが示され, 「努力ができ, 他者の援助がある」ことが進路意識の成熟において重要であることが示唆された。さらに, ③手段の認識において, 「運の認識」が高まり, 「努力の認識」や「他者の援助の認識」が低下するという結果が示されたが, これは, 進路に対して努力もして, 援助もあることが, 同時に現実を知ることとなり, これまでの努力や援助だけではうまくいかないのではないかという, 不安が広がるためだと解釈された。

## 引用文献

- 廣瀬 等・島袋恒男・井上 厚・高嶺 貢・大嶺和男 1996 高校生の進路達成への統制感とその手段の保有感と認知に関する研究(2) —進路CAMIと学習スタイルの関連— ヒューマンサイエンス (琉球大学法文学部紀要), 2, 89-106.
- 廣瀬 等・井上 厚・島袋恒男 1996 沖縄県の児童・生徒の学習の統制感と原因帰属に関する発達の研究(Ⅱ) —進路発達との関係で— 琉球大学教育学部紀要, 48, 405-416.
- 廣瀬 等・島袋恒男・井上 厚 1996 沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択と進路成熟態度との関連 琉球大学教育学部紀要, 49, 201-211.
- 坂柳恒夫・竹内登規夫 1986 進路成熟尺度(CMAS-4)の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), 35, 169-182.
- 坂柳恒夫 1992 中学生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 16, 299-308.
- 坂柳恒夫 1993 高校生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 17, 127-136.
- 島袋恒男・廣瀬 等・井上 厚・大嶺和男・高嶺貢 1996 高校生の進路達成への統制感とその手段の保有感と認知に関する研究(1) —進路CAMIの作成とその発達— ヒューマンサイエンス (琉球大学法文学部紀要), 2, 69-88.
- Skinner, E.A., Chapman, M., & Baltes, P.B. 1988 Control, means-ends, and agency beliefs: A new conceptualization and its measurement during childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 117-133.